

聖書：第一サムエル記2章1～7節

説教：主の祝福があるように

1 上って行くべきでしょうか

1) 親サウル派対反サウル派

サウルは、ペリシテ人との戦いに敗れ、戦場で倒れます。息子ヨナタンも死をとものにします。人々は自分たちの将来を託した王を失い、騒然となります。おおきな不安が人々の心を覆い尽くしていきます。

こんな時、政治的な野心を持つ者たちは、いろいろなことを計画し始めます。誰が味方で誰が敵か。その色分けをするのです。具体的に言えば、サウルがいなくなった後もサウルの家に忠誠を誓い、親サウル派として残る者は誰か。それとは反対に、日頃からサウルに対して反感を持っていて、サウルが死んだことをきっかけに反旗を翻す者は誰か。親サウル派と反サウル派。二つのグループに色分けし、自分にとって有利なのはどちらか。政治的な駆け引きが始まります。こんなことが続いていけば外の敵に対しては絶好のついているチャンスを与えることにもなります。一刻も早くリーダーが定まり、一つにまとまらなければなりません。

2) ダビデの立場

ダビデはサウルから追われてイスラエルから離れ、今は敵であるペリシテ人の領地にかくまわれている身です。現代風に言えば、祖国を逃れて海外に亡命している政治家です。サウルとヨナタンが倒れ、自分の祖国が存亡の危機に立たされていることを知っています。祖国を救うために戻らなければならないと考えます。けれども、戻るのは簡単で

はありません。理由が二つあります。

一つ目。理由はどうであれ、ダビデはイスラエルを捨てて敵であるペリシテ人の領地に逃げ込んだ立場にあります。このことイスラエルに戻れば、人々はどうのように迎えるでしょう。祖国を捨てた裏切り者。こう呼ばれる可能性が非常に高い。人々が快くダビデを迎えてくれるのかどうか。その判断が非常にむずかしい。

二つ目の理由。イスラエルは親サウル派と、反サウル派に分裂しています。ダビデはサウルから追われていました。こんな騒ぎの中、ダビデが国に帰れば、「おまえは反サウル派だろう」と人々から言われ、サウルの家とぶつかり合うことになります。せっかく祖国ためを思って戻っても、混乱に拍車をかけることにもなりかねません。

3) ヘブロンでユダの家の王となる

どう考えても、ダビデが祖国イスラエルに戻れば茨の道が待っています。そんなことなら、今のところにとどまっていたほうがずっと安全です。彼には家族がいます。部下たちがいます。ダビデは彼らを守り養う義務があります。とどまるか、それとも祖国に戻るか。ダビデは迷いながら主に伺います。

「ユダの一つの町に上って行くべきでしょうか。」主の答えは「上って行け」でした。安全な所にとどまってはならない。たとえ危険なことがわかっていても前に進むようにと促されます。

そのようにしてダビデは祖国に戻ります。

示された場所はヘブロンです。なぜその町であつたのか。理由があります。第一サムエル記30章26節。「ダビデはツィケラグに帰つて、友人であるユダの長老たちに分捕り物のいくらかを送つて言った。「これはあなたがたへの贈り物で、主の敵からの分捕り物の一部です。」」その送り先の一つにヘブロンも含まれています。何の関係のない所に行けと言われたのではありません。ずっと以前からダビデは、ユダの人々とヘブロンの人々と信頼関係を築いていたのです。

「信仰さえあればあとは神が何とかしてくれる」、と言う方もいます。間違いとまでは言いませんが正しいとも言えない。ダビデは、きちんとした裏付けをもった場所に導かれています。ヘブロンでユダの王として迎えられるいきます。しかしその先どうなるかはわかりません。そのことを神に委ねて進んで行きます。それが信仰者ダビデの歩みでした。

2 ヤベシュ・ギルアデの人々

祖国に戻つたダビデ。ここまでは順調でした。けれども越えなければならない問題が残っています。ダビデはかつてサウルから追われていた身です。当然、人々はダビデのことを反サウル派の最大勢力とみなします。これは親サウル派にとって大きな脅威です。ダビデは長年の恨みをはらすために、サウル一族を根絶やしにするのではないかと考え、ダビデを警戒するでしょう。このまま行けば、国を二つに分ける争いになります。それは、ダビデの望んでいたことではありません。ダビデはどうしたのでしょうか。

5、6節にこうあります。「ダビデはヤベシュ・ギルアデの人々に使いを送り、彼らの

言った。『あなたがたの主君に、このような真実を尽くして、彼を葬つたあなたがたに、主の祝福があるように。今、主があなたがたに恵みとまことを施してくださるように。この私も、あなたがたがこのようなことをしたので、善をもって報いよう。』

ヤベシュ・ギルアデの人々は、サウルが戦場で倒れ、敵の城壁に吊されていると聞いたとき、危険を冒してそのなきがらを取りに行き、自分たちの町まで運んで丁寧に葬りました。ダビデはそのことを高く評価し、「主の祝福があるように」と励まします。

ヤベシュ・ギルアデは、ご覧の通りにサウルに忠誠をつくしている人々です。親サウル派の象徴です。そんな人たちダビデのメッセージを送ります。ダビデは反サウル派ではない。自分は、あくまでも親サウル派の仲間であるとの政治的な立場を国中に明らかにします。

3 ダビデ

1) 人々と痛みをともにする

このように見てくると、ダビデは祖国イスラエルの危機に際して、非常に思慮深く振る舞っていることがわかります。有能な政治家です。しかしまた彼は信仰者でもあります。腹の探り合いをしながら巧みに国家を操っていたわけではありません。ダビデのふるまいを通して主イエスの姿が見えてきます。

ダビデは、ペリシテ人の地に留まり、家族とともに平穏な日々を過ごすことも選択できました。けれども、安全な所に留まるのではなく、あえて燃えさかる火の中に飛び込もうとします。自分の家族、自分の部下、そして自分のいのちさえどうなるかわかりません。それでも、ダビデは祖国に帰られなければ

ばならないと突き動かされます。なぜそこまでするのでしょうか。二つのことを言うことができます。

一つ目。人々はサウルを失い、ペリシテ人に襲われ国は滅ぶかもしれないと不安を抱えています。戦争で多くの人たちが死んでいます。ダビデは、祖国の人々の苦しみは、そのまま自分の苦しみと感じています。自分のいのちがどうなるかわからなくても、祖国の人々と生死を共にしていく。それがダビデの信仰でした。

主イエスも同じです。この方はご自分の国に来られました。病やからだの障がいや苦しむ人々ともに涙を流されます。けれども人々から裏切られ、十字架に追いやられます。罪に苦しんでいる人たちを救うために、ご自分のいのちを投げ出されます。罪という火の燃えさかる私たちの世界に主は飛び込んでくださいました。ダビデを通して主の姿が見えていきます。これが一つ目です。

2) 祝福の使者

二つ目。ヤベシュ・ギルアデの人々は主君サウルが敵の手に倒れたと聞き動揺したでしょう。加えて、ダビデが反サウル派の急先鋒となって自分たちを懲らしめに来るかもしれないと考え、ますます不安になったことでしょう。

そんなヤベシュ・ギルアデの人々にダビデが語ったことはこうです。5節から7節にかけて。「主の祝福があるように。主があなたがたに恵みとまことを施してくださるように。」「さあ、強くあれ。勇気のある者となれ。」

自分を憎み殺そうとしたサウル。そのサウルが死んだときなきがらを丁寧に葬ったと聞けば、普通ならどう思いますか。苦々しい

思いがわいてきませんか。「サウルの間でそのようなやつらは滅んでしまえ。」呪いのことばを吐きたくありませんか。

しかし、主イエスはルカ6章27、28節でこう語っています。「あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。」

ダビデもそのようにします。敵を呪うのではなく、祝福しなければならないと考えます。

3) あなたの敵を愛しなさい

もし敵を憎んだままならばどうなるでしょう。憎む者を懲らしめれば、いつきは気が晴れるかもしれません。でも、それで本当に平和になったのでしょうか。もっとひどい憎しみが生まれるだけではないですか。ダビデが親サウル派の人々を憎み続けていたなら、イスラエルはばらばらです。神の国は立ちゆきません。ダビデはそのことを知っています。国を一つにまとめていくためには和解が必要です。誰が和解するのか。自分以外の誰かではありません。まず自分からです。自ら和解する必要があります。主も言われます。「あなたの敵を愛しなさい。」

でも、愛せるでしょうか。相手の罪を赦せるでしょうか。新聞の広告を見ていたら、最近「許す力」という本が売れているのだそうです。なぜ売れるのか。簡単です。赦せないから、ですよね。世界で起きている戦争や争いを解決する決め手は、武器や力ではなく、相手を赦すことであると、多くの人たちは気がついていきます。でも争いはなくならない。赦すことが大事だと知りながら、赦せないのです。人を赦せない思いをかかえているのなら、心の内には平和がないということになり

ます。けれども、口では世界が平和であるように、と人々は祈ります。

ヤベシュ・ギルアデの人々が、ダビデのこぼをどのように受けとめたかは、なにも触れられていません。彼らがダビデを受け入れようが、あるいはたとえ拒んだとしても、ダビデが先に彼らを赦し、祝福を与えます。

主も同じです。私たちはこの方を拒みましたが、この方は先に私たちを赦し、受け入れてくださいます。この方は敵である私たちを愛します。自分を殺した敵である私たちを赦します。私たちが悔い改めたから、それで赦したわけではありません。

私たちはできますか。むずかしい。あの人を絶対に赦すことができないというところで苦しんでいます。そんな私たちを主が先に赦してくださり、導いてくださいます。その恵みを覚えます。